

## 22. 知ることは減災につながる

私たちが、この日本列島で暮らすということは、つねに自然災害と遭遇することが避けられないことです。それは災害の素因と誘因がそろっているということと、自然現象そのものが、近年変幻自在で強力になっているということにあります。

したがって、被害を最小にして犠牲者をなくすには、個人に求められることも多く、他人ごとに構えて過剰な行政への期待は、禁物です。

そうすると、科学的知見とこれまでの経験を駆使した減災への意識を共有することが重要なこととなります。災害対応の避難行動は基本ですが、何が起きるのか、なぜ起きるのを知って相手をかかわることが求められています。つまり、自然災害はそれぞれに特性があって、発生する環境で様々に変化します。そのために、見た目は高波と同じだが津波はなぜ怖いのか、土砂災害のしつこさなどのメカニズムとその実態を知っておく必要があります。そして、現象を表層的にだけ見て、その時何とかなると思うことは大変に危険なことになります。

災害はモノや命にかかわることではありますが、精神的な喪失感が長く残るということがあって、時間と金だけで復旧や回復が可能になるものでもありません。災害対策は無駄な出費だし、その対策のエネルギーの供出は徒労なことで決して望ましいことではないということを共通の認識にしていかなければなりません。

自然災害で最も大事なことは、先行きの読みです。行政からの予報などはもちろんのこととして、これからどうなっていくのか、そこで知識を応用してリスクを知って適切に行動するということとなります。この辺の災害適応能力を日ごろから醸成することが必要なこととなりますし、これを他に求めていくことは難しいことです。減災は、一人ひとりが自分の命を救うことで、だれかが手を差し伸べることを期待しているだけではいけないことだと思います。

そもそも、知るということは事態を読み避難するということにつなげるためのものです。災害が発生したり、発生が予想されるときに大きな障害となるのは、自分だけは大丈夫という正常性への偏見であったり、情報も自分に都合の良いものを選択するというもの、普段では考えられない異常な発作的な判断などが不適切な行動を引き起こします。そういうときに、知識を勘として働かせるということになります。特に、情報が多様な時代ですので、その判断がこれから大変に重要なものになります。

いずれにしても自然災害は起きてから何ができるのかというと、状況の判断で適切な避難行動ということになるので、地域の災害リスクを理解したうえで、正しい知識があれば、正しく恐れるということもできるのだと思います。